

大和國分寺十一面観音立像

場所：大和國分寺

日時：平成 28 年 12 月 11 日

説明：神田雅章さん(仏像の専門家、奈良県文化財保存課)

概要

所在：八木町国分寺（通常非公開）

品質・形状・寸法など：像高 177.5cm、面長 15.0cm、面巾 15.2cm、耳張 18.0cm、面奥 20.0cm、肘張 46.0cm、裾張 41.8cm、櫓（けやき）材・一木造・内刳・着衣

年代または時代：平安時代中期

解説：頭上に十一面を戴き、胸前を大きくはだけたゆるやかな法衣を着し、左手を屈臂して水瓶を執り、右手は体側に沿って垂下させ第一指を曲げる。

細身の像で、臍（まなじり）の吊り上った個性的な表情や、深く刻まれた胸・腹のくびれなど古様な所がみられ、両膝には翻波式衣文（ほんばしきえもん）が刻まれています。このような特徴から、制作年代は 10 世紀末から 11 世紀にかけての頃であると考えられている。

（橿原市 HP より）

1926.08.30(大正 15.08.30)重要文化財に指定



八木國分寺にて

お姿の説明です。まず髻(もとどり)のてっぺんに如来の仏面がのり、その周囲一段下、正面に「菩薩面」(本面と同じ)、左にこわい顔の「瞋怒面」(しんぬめん)が三つ、向かって右側に牙をむき出した般若のお面のような「白牙上出面」(くげじょうしつめん)、ま後ろには大きい口を開けて笑っているような顔の「暴悪大笑面」(ぼうあくだいしょうめん)があります。こうしているんな顔を、厳しい顔、優しい顔、時には笑い飛ばすような顔をもって我々衆生を導いています。

この御像は十一面観音ですが、頭上面は十面しかありません。こうした御像は十一面観音にはよくいらっしやいます。この仏像の元になる長谷寺の重要文化財の十一面観音(室町時代)も正面の菩薩の面がひとつ足りません。頭部正面に阿弥陀如来の化仏(けぶつ)がいらっしやってもともとスペースが狭いのですが、この場合、本面を含めて十一面観音といっています。法隆寺の九面観音も面が足りないというより本面がいろんな面の代りをなさるという考え方もあります。

お顔

お顔をみますと、額に丸い粒「白毫」(びやくごう)があります。水晶玉でつくることが多く木でつくることもあります。本当は長い毛を右巻に丸くなっていることを表現しています。耳たぶに穴があります。仏像のモデルのお釈迦さんが釈迦族の王子だった出家前につけていた装飾品イヤリングの痕跡です。首には「三道」(さんどう)といわれる三本のしわがあります。まれに二本や四本だったりします。

身につけているものとして、裸の身に「条帛」(じょうはく、たすき状のようなもの)を掛け、そして両肩から「天衣」(てんね、羽衣のような細い布)を掛け、これを膝前に交差させそれぞれの腕に掛けています。

衣装と立ち姿

下半身では、裳(も)とか裙(くん)とか呼び、布をバスタオルのように巻き、腰で折り返し前掛けのようにしたときの正面に垂れた部分を指します。

腕は、左手を曲げて「水瓶」(すいびょう、蓮華をいれた瓶)を持ち、右手は下ろして、親指だけで「錫杖」を持ちます。

立ち姿は、ウエストが少し斜めになる姿勢です。左足を主脚にして右足をゆるめるポーズをまねしながら実際は、直立しています。

光背は、舟型光背で十一面観音の梵字が十一あります。光背や台座は金色に輝いています。デコレーションケーキのような蓮華座が下にありますが、これらは江戸時代に補われたものです。黒ずんでみえますがケヤキの一木造りです。頭上面はすべて、まげている左手の肘から先、先右手の手首から先、足の甲から先以外はケヤキの一木でできています。

彩色金箔が残っていないので、当初の仕上げは不明ですが、古色(汚れた落ち着いた色)になっている木肌を見ると、ケヤキとわかります。一本の木では干割れが入るので、それを防ぐため上半身と下半身に四角い窓をあけ、内繰りを施し、干割れを防ぐのと合わせて軽量化も図っています。

光背と台座は、細かい部材を寄せて漆箔を貼る技法で造られています。

製作年代

保存状態として、当初と後に補われた部分を区別します。どの部分が後補かといわれたら、先ほどの一木以外の部分がすべて後に補われた部分で、江戸時代と思われます。よって十一面も当初の姿はよくわかりません。錫杖を持っていますが当初

は持っていなかったと思われます。時代によって信仰の影響を受け姿・形がかわっていきますので見極めが必要です。

製作年代は、10C 末～11C 初め、西暦 1000 年前後と思われます。どうしてわかるかとよくきかれますが、明文(仏師や制作年)はなし、文献・記録・古文書にもでてきません。一木造りという構造技法や作風をみて、製作年代が判明している御像を参考にします。

作風と様式

非常にほっそりしています。スマートで八頭身いや十頭身かと思う、小さなお顔の像です。スリムな像です。

横から見ると、背筋が伸びてかなり姿勢がよいが、おなかだけぽっこり出ています。胸のくびれは深くつくってありますが、その位置が大分下にきていて、平盤です。これは時代が下る要素です。

おおまかですが、奈良時代までは、乾漆やブロンズや土を使う、つまり国家仏教として税金を使って高価な仏像をつくりますが、平安時代仏教が広がると、造りやすい木彫像にかわってきますが、最初は一木でつくります。

様式は、遣唐使がもたらした大陸の様式、つまり量感のある様式ですが、825 年遣唐使廃止後は、大陸の影響が止み、日本人好みのおだやかな、温和な表情になってきます。一木造りも木の調達が困難になり、複数の材を寄せる寄木造りにかわります。その完成形が宇治の平等院の本尊阿弥陀如来(仏師定朝)で、だんだん和様化が進みますが、この國分寺十一面観音をみると、定朝の作に到達する半世紀ほど前、和様化が進んでいる時代の作といえます。

しかしこの御像の作風には新旧の混在がみえます。足元の翻波式衣文(ほんばしきえもん)は、平安初期の彫刻の特徴で、衣のしわを通常あり得ないほどに、大波小波をつくってデザイン的に、しかも彫りが深く、彫刻刀の切れ味を存分に見せつけるかの如く、陰影のある御像をつくるのですが、この御像はその襷数が大分減っていて、大波小波もおとなしい彫りの表現で、退化というか、翻波式のなごりがある程度といえます。

まなざし

顔については、つまり目が厳しいとも見えますが、自分の主観としては、おじいちゃんおばあちゃんがお孫さんをみるときの表情、目を細めて慈しみをもって大切な人を見るときの目に思えます。目が細いが目頭の方に力が寄るような目です。時代が下ると、瞑想しているような、眠っているような目に見えます。時代と共にやさしいおだやかな表情に近づいていきます。

御像の歴史と観音ロード

以上から、西暦 1000 年ごろの作品と類推します。この御像の歴史を考えますと、重要なのは長谷寺式の姿である点、これは後世に改造されてのことです。仏師快慶(鎌倉時代初め)のときに錫杖を持つようになったようで、作例としては、奈良市の伝香寺の観音像が最も古い、錫杖を持つ像ですので、國分寺御像が錫杖を持つのは早すぎます。

なぜ改造されたかという点、長谷寺の御本尊が信仰を集めたことにつきますのですが、國分寺は横大路に立地します。長谷寺に向かう道、三十三所巡礼を考えると河内藤井寺からまわれば、伊勢街道ではあるが、長谷寺に向かう「観音ロード」ともいえるのではないかと。大和高田にある真言宗豊山派(ぶざん)は長谷本寺の御像(県指定)も後世に改造され錫杖を持ちます。元橋本寺だったのが長谷寺の信仰のためか、橋本寺+長谷寺がなまって長谷本寺となったといわれています。

もう一点、斜めな見方かも知れませんが、中世には国中はほとんど興福寺の荘園になりました。室町時代の文献によると、長谷寺の御本尊の開帳をし、群衆が集まったといわれ、この上がりが興福寺に入るという「集金システム」があり、荘園内では多くが長谷寺式の観音をいっぱい祀ったといわれています。

長谷寺の今の本尊をつくった仏師の中に興福寺の大工である番匠出身の宿院仏師らがいて、国中に長谷寺式の仏像をたくさん造り、観音信仰が広がりました。

この御像が錫杖をもった経緯がこれで分かるような気がします。

國分寺といえば、一説に国府(今でいう県庁)におかれ、そのそばにつくられた寺でありました。また一説には、八木寺延命院に伝わった御像ともいわれますが、いずれにせよ真言宗が廃れるにあたり、こちら國分寺に引き取られたのではと思われます。大和では多いケースとして、江戸時代に檀家制度ができて浄土系への信仰が広がり、いっぽう真言系は檀家を失いつぶれて公民館みたいな存在になり、村の鎮守と一緒に存在する神仏習合式の社寺を構成していたが、結果、無住社寺になったものが多いです。

(記録：稻上文子)

國分寺

勝満山(しょうまんざん) 満法院(まんぼういん)
國分寺は浄土宗で、本尊は阿弥陀如来坐像、観音・勢至(せいし) 両菩薩坐像が両側に配されています。

靈驗あらたかな如来で多くの信仰を集めています。他に、善導大師(ぜんどうだいし)・円光大師(えんこうだいし) 像などが祀られています。

また、本堂横の収蔵庫には、平安時代中期の作品、
国の重要文化財に指定されている十一面観音立像
があります。

檼（けやき）の一木造りで、膝下には当時の特徴的
な技法である翻波式衣文（ほんばしきえもん）が
刻まれています。

平成 15 年に焼失した本堂は、明治時代の小学校の
前身である「培擁社」（ばいようしゃ）として使わ
れていました。

（橿原市 HP より）